

澤田廉三の手紙

― 敗戦前後の活動を中心に ―

清水 太郎

はじめに

澤田廉三（一八八八―一九七〇年）は、鳥取県岩井郡浦富村（現岩美郡岩美町浦富）出身で、大正から昭和にかけて活躍した外交官である。長兄の節藏（一八八四―一九七四年）も同じく外交官として活躍している。

当館が澤田廉三調査を開始するきっかけは以下の通りである。鳥取女子高等学校（現鳥取敬愛高等学校）の社会部は、平成一四年度からエリザベスサンダースホームとその設立者である澤田美喜（一九〇一―八〇年）の調査を始めた。澤田美喜は三菱財閥三代目当主岩崎久弥（一八六五―一九五五年）の長女であり、大正一一（一九二二）年七月

に廉三と結婚している。社会部の調査は、鳥取県内外はもちろん、ブラジルまで及んだ。神奈川県大磯町にあるエリザベスサンダースホームは、美喜が昭和二三（一九四八）年に創設、運営にその生涯を捧げたものだが、その敷地内には澤田廉三夫妻が生活した日本家屋の一部が現在も残る。社会部が邸内に澤田夫妻に関する資料が残されていることを発見し、当館にその情報を寄せたことが澤田廉三調査を開始したきっかけである。¹⁾

当館では夫妻の内、特に本県出身者でもあり、また従来本格的な調査、研究が行われてこなかった澤田廉三に焦点をあてることとし、平成一七年度から予備調査を、翌年度から本格的な資料調査を開始した。

当館の調査により、エリザベスサンダースホーム内に澤田廉三に係る書簡や写真など約千点が残されていることが判明した。ただし、虫害がひどかったため、許可を得た上で当館に搬送し、くん蒸を施した上、整理、目録化作業を開始した。この作業は現在も継続中である。

一方、澤田廉三は、多くの外交官がそうであったように回想録を残している。一つは、自身が公職追放中に記した『凱旋門広場』（角川書店、昭和二五年）で、もう一つは、亡くなる昭和四五年に原稿を準備しながら実際の刊行までに二〇年の歳月がかかった『随感随筆』（牧野出版、平成二年）である。これら二つの回想録は廉三自身が外交官としての自身の経歴をどのように考えていたのかを知る上で貴重な資料である。

また、外交官としての地位が高くなってからの記録は、外務省外交史料館・国立公文書館等に見いだすことができる。しかし、廉三の経歴の中で回想録や公的記録からはその動静を知ることができない時期が存在する。その一つに昭和二〇年が揚げられる。八月一五日の敗戦という日本の大きな転換点となったこの年、廉三は春まで二度目の外務次官を務めていたのだが、これ以降、敗戦前後にわたる時期の廉三の動きは自身の回想録からは確認することができない。また、公開されている他資料などでも同様である。²⁾

今回見つかった資料の内、昭和二〇年に廉三が自身の郷里である鳥取の浦富に疎開中の妻・美喜に宛てて送った書簡が多数確認されたが、これらの書簡は、廉三のこの時期の動きを知ることができるだけでなく、日本の外交史、近現代史にとっても貴重な史料となり得る。

本稿は、昭和二〇年の敗戦前後、澤田廉三が妻・美喜に宛てて送った書簡の紹介と分析を中心に、敗戦前後の廉三の活動について考察を行っていく。

一 廉三から美喜宛の書簡

まず、対象とする資料の特徴をあげる。昭和二〇年に廉三と美喜との間で交わされた書簡は全部で三一点である。すべて在京中の廉三から美喜（浦富）に宛てられたものである。これらの書簡中には「御身の速達便…」等の文言が確認でき、美喜が廉三に宛てた書簡も存在したはずであるが、今のところ確認できていない。

さて、本稿が扱う書簡は、表一に示した通りである。五月二四日付から一月一二日付まではほぼ一週間に一度は疎開中の妻に宛てて書簡を送っていることがわかる。

[表一1] 廉三から美喜宛書簡一覧（昭和20年分）

番号	年月日	本稿掲載No.	番号	年月日	本稿掲載No.
1	5月24日		14	8月17日	書簡7
2	5月25日		15	8月20日	書簡8
	9月2日		16	8月23日	書簡9
3	6月4日		17	8月29日	
	6月17日	書簡1	18	9月2日	書簡10
	6月25日		19	9月8日	書簡12
4	6月7日		20	9月9日	書簡14
5	6月10日		21	9月11日	書簡15
6	6月14日		22	9月15日	書簡16
7	7月?日		23	9月20日	書簡17
8	7月9日		24	9月24日	
9	7月18日		25	10月20日	書簡19
10	7月22日	書簡2	26	10月24日	
11	8月2日	書簡4	27	11月3日	
12	8月7日	書簡5	28	11月12日	
13	8月14日	書簡6			

注) 番号2と3は、同一封筒に複数の書簡が入っていることを示す

最初の書簡が五月であるのは、激化する東京の空襲を避けるため、美喜が娘の恵美子を伴って浦富にある澤田家の別荘鳴鳴荘に疎開したからであるが、美喜は同年六月下旬から七月初めにかけて短期間上京した形跡もある。¹⁾
また、廉三は、五月一三日まで外務次官の任にあり、次官退任後も東京を離れることなく、引き続き義父の岩崎久弥とともに東京本郷茅町の岩崎邸に滞在した。現存する美

しくともつらくとも抗戦反撃をつづけざるべからずと言ふに有之候
月白に影うすれ行く星の群、
星条旗ハ異状を呈し
星影うすれ行くべくそれまで
どうしても戦ひ抜かざるべからず候。

(後略)

冒頭の小林大将とは、小林躰造を指すと思われる、小磯内閣のもとで二度目の外務次官を務めていた廉三とも接点があったはずである。²⁾ 両者の会談の詳細は不明だが、昼を挟んだ会談の様を伝えている。それによれば、徹底抗戦貫徹の情報を得ている。

この時期、沖縄での激戦はアメリカの圧倒的な軍事力の前にほぼ終局しつつあり、また日本各地への空襲も激化していたが、昭和二〇年六月八日の御前会議では、戦争の完遂が改めて決定されており、小林大将の情報はこの御前会議での決定を踏まえてのものであろう。これ以前の書簡では、同年五月二五日から翌日にかけての高空襲の様子を伝えており、本書簡の行間からも、東京での甚大な被害を目の当たりにしている廉三が小林大将から終戦の望みを打ち

喜宛の封書の差し出しの大半が「東京本郷区切通町一 岩崎邸」となっているのはこのためである。³⁾

最後の書簡は、一月一二日付である。これはこの月の一九日、日本が推したチャンドラ・ボース率いるインド国民軍について証人として出廷するため、廉三がインドのデリーへ向かうこととなったためである。⁴⁾

以上を踏まえて、本稿は、「美喜の疎開から敗戦まで（昭和二〇年五月〜八月）」、「重光外相下の廉三の活動（同年八月〜九月）」、「重光の外相辞任後からインド行まで（同年九月〜十一月）」に三区分し、主に、時局、政局に関する観点から検証を試みたい。

二 美喜の疎開から敗戦まで

〔書簡1〕昭和二〇年六月一七日付

(前略)

小生ハ小林大将往訪の約束ありし為め早朝のり弁当持ちにて世田ヶ谷に出かけ午後二時半まで話しつづけて帰り申候結論は敵陣営に異変あるまで苦

消す情報を得、現時点では星条旗、つまりアメリカ側に異変が生じない限りこの戦争が終結しないと諦めにも似た心情、先行きが見えない不安を吐露している様子がわかる。

皮肉なことに翌六月一八日には、昭和天皇から鈴木貫太郎首相に終戦準備の督促がなされており、さらに二二日には、最高戦争指導会議で終戦準備の必要性が話し合われるなど、終戦へ向けての動きが加速するが、廉三がこれらの情報をどこまで把握していたのかは不明である。事実、これ以降、終戦にむけての中央の動きを具体的に記した記述は見られない。

〔書簡2〕昭和二〇年七月二二日付

(前略)

小生も不相変外務省関係の会合などに顔を出し重光君依頼人を訪問したりして暮し居申候重光君ハ諸戸別荘にて梯子段より足をふみはずし暫く腕を痛め居りたる由、中央より遠ざかりて徒に世の中の動きに気を取らぬ様子を付其内小生日光

まで往復して来ようかとも存居候

(後略)

廉三は、昭和二〇年五月一三日に外務次官の職を退いた後、外務省嘱託の身分であったが、次官辞任後も外務省関係の会合に参加していたことがわかる。中でも重要なのは、前外相重光葵（一八八七―一九五七年）との密接な関係を窺わせる記述が見られることである。

これ以前の書簡では、重光の名は出てこないが、ここで初めて重光の名が出てくる。二度目の外務次官就任時の外務大臣は重光葵で、廉三の次官就任は重光の要請であったと考えられる。従来の日本外交史研究及び廉三自身の回想録等からは外務省内での廉三の立場、または人脈などに関しては不明な部分が多く、廉三が外務省内のどのような人脈の中に位置していたのかが見えにくかった。重光も廉三も第一次大戦後のヴェルサイユ講和会議後、大正八年九月に外務省内に設置された「革新同士会」の創設メンバーであり、先ずこの集団の中に廉三を位置付け、人的関係を連想していくのはさほど困難ではないだろう。ただし、それを裏付けるような資料は現在までほとんど明らかになっていない。今回新たに発見された廉三から美喜苑の書簡の重要性の一つは、敗戦前後の時期、戦中・戦後と外相を担当

した重光葵との関係が非常に深かったことが資料的にもはっきりと裏付けられることにある。

重光は同年四月七日に小磯内閣の総辞職に伴い、外務大臣を辞任した後、日光の諸戸別荘に蟄居していたものの、時局、政局の動きを大変気にしていたことがわかる。廉三とは緊密に連絡を取り合っていたようで、廉三は具体名を挙げていないが重光から託された人物と東京で接触し、時局、政局の情報を収集して、重光に連絡していた。さらに日光まで出向き直接重光と情報交換することも考えていたようであるが、現存する書簡などからは廉三の日光行きは確認できない。

ただ、同時期に重光葵から廉三に宛てた書簡が残されている⁽¹⁰⁾。これを読み比べることで〔書簡2〕をより詳しく理解できる。

〔書簡3〕昭和二〇年七月二一日付

拝復

両度の御手紙万

謝然る処竹光

を以て申上候通りの始

末にて小生長々体

を痛め不本意乍ら

御無沙汰申上候老兄も

本郷に御避難

の御様子御元気の

模様二付大二意を

強うし候

戦局内外政局何と

なく切迫感あり痛

心の極二候小生の出京

も足溜り見付からず

思ふに委せず候出

京之節ハ必ず御面

語を欲し度き二付

連絡申上候二付万事

宜しく願上候

諸事意ニ委せ

ず唯々国家の将

来を憂ふるのみニ候

近い内定期的ニ

東京連絡を付け

る積りニ付書き物

の往復ハ事欠

かぬ様ニ致すべく候

日光にも飛行機

の音を聞く様二相成候

も天気ハ恢復し之

よりハ陽気もよく

相成るべく候

安岡正篤氏には何

卒御連絡し置被

仕度

尚松平侯広瀬

前厚相等には之通可成

く御連絡可然候

以上

七月十一日

葵

沢田兄

冒頭重光は廉三から「両度」つまり二度、書簡を受け取っていたことを記している。恐らく、時局、政局などに関する記述があったと思われるが、詳細は不明である⁽¹⁰⁾。一方、重光からは秘書の竹光秀正を通じて廉三に情報もたらされていたことがわかる。

重光は、廉三以外からも様々な人物から中央の情報を得

ていたはずで、廉三からの情報も含めて戦局の悪化と政局の混乱に深い憂慮を述べている。また、上京の折には廉三と面会し、情報交換を行いたいこと、それまでは書簡による情報交換を緊密に行いたいことを述べている。

〔書簡3〕で廉三が重光の依頼により接触を図った人物が明かとなる。まずは重光が外相時代に兼務していた大東亜大臣の顧問であった安岡正篤である。その他、松平侯（康昌）、広瀬（久忠）元厚生大臣などいずれも外務省関係者とは異なる人物たちと連絡をとっていた。

〔書簡4〕 昭和二〇年八月二日付

（前略）

御父上様今尚末広御

滞在中、空襲も千葉

がやられたあとなれば、末広の方

か東京よりも安全感多く

ゆつくり御滞在になることかよろ

しと存居申し候

（中略）

ポリティックスは急急動き居る

従って毎日本人をたづね歩き居

申候少し瘦せたるも元氣

は不相変なり御安神被下
度候 早々

御父上様とは岩崎久弥である。久弥は空襲が激しくなった後も基本的には東京から疎開することはなく、茅町の岩崎邸で起居していた。番町の家屋が罹災した廉三は茅町の岩崎邸に身を寄せ、久弥と生活を共にしていた。この書簡からは、この時期、久弥は千葉県富里にあった末広牧場に滞在していたことがわかる。

政局が急展開している様子を伝えるが、八月に入り、終戦工作はいよいよ本格化する。その一方で様々な情報が飛び交い、廉三もより具体的な情報を求めて駆け回っている様子がうかがえる。

〔書簡5〕 昭和二〇年八月七日付

拜啓

昨五日本家よりの御知らせによれ

ば七月三十日岩美駅付近敵

機の襲撃を受け二三機

犠牲もありたる由驚き申候敵は其内

鳥取市をやる予定の由、小

磯の谷までは降下困難なれば

〔書簡6〕 昭和二〇年八月二四日付

国際情勢の急変により

浦富の冬籠りも必要なく

なり存外早く番町の家に

家族のレユニオンを行ひ得

るに至るやも知れず其積りにて

居られ度候

（中略）

此揃ひも揃ひし四人の子供か一人欠

けたる事ハ如何にも胸つま

る思ひ切なるもの有之候

（中略）

時局急転に付重光君も

上京し来り居申候こんな事

で小生の浦富帰省も実現

不可能かも知れず候

急ぎ右まで

廉三は「敵は其内鳥取市をやる予定」とも述べているが、昭和二〇年に入り、米軍機からまかれた大量の空襲予告ビラの中には、空襲目的地の一つに「鳥取」もあげられていた。「小磯」は美喜たちが滞在中の別荘「鷗鳴荘」がある熊井浜を指す。

冒頭部は明らかに「終戦」を指している。八月九日から一〇日にかけてと一四日の二回にかけておこなわれた天皇親臨の最高戦争指導会議によりポツダム宣言受諾が決定するが、どの段階で廉三は終戦を知ったのであろうか。現在

のところ、「書簡5」の八月七日から「書簡6」の一日までの間に記された書簡は確認できない。廉三が記した他の書簡の場合、重要事項はなるべく情報を入手した当日に知らせる傾向が見られることから、一四日に情報を得たと考えるのが妥当と思われる。

書簡前半では終戦により家族が東京で「レユニオン（再会）」¹⁹できる可能性が高いことを喜ぶ一方、この年初めにインドシナ沖で戦死した三男晃についての無念の思いを綴っている。

書簡末尾では重光葵が日光より上京したことを伝える。

重光は、木戸幸一内府や外務省職員の依頼もあって八月七日に上京し、終戦工作に参画した。その後、ポツダム宣言受諾の動きを確認し一旦日光に引き揚げるが、一二日再度上京、一四日のポツダム宣言受諾を見届けた後、熱海に移動した。

一方、廉三が得た終戦の情報源は重光から得た可能性が高いが、はっきりしない。重光の手記などからはこの時期の重光と廉三との接触を示す記載は見られない。

三 重光外相下の廉三の活動

敗戦の二日後、史上初の皇族内閣である東久邇宮稔彦内

りにて居られ度候

いよいよ宮様内閣にて重光

君、外務大臣となりたるを以て

小生も又々一層の走り使ひ、聯

絡屋の用事が出来ることと

予想致居候若しそうなれば

出入の便利、又人の来訪の便

宜を思ひ爆弾の恐れもなきに鑑み又々帝国ホテルに

出馬した方がいかとも考へ居

申候

(中略)

敵占領軍の進駐し来る

後に於てハ相当堪忍袋

の緒をしつかりしめて居らねば

ならぬ事もあるべしと存ずるも

少くも唯今の所、火事

や爆弾の恐れなく、夜中に

防空壕通ひの必要もなく

此点御父上様にも余程

安神し居らる、様見受けられ

(後略)

閣（昭和二〇年八月一七日〜一〇月九日）が成立し、重光は外相に就任する。今回、発見された書簡からは、敗戦直後のこの時期、廉三が重光外相と頻繁に接触、連絡を取り合い、行動していたことがわかる。本章では、敗戦直後、約一月ほどの短時間ではあったが、重光葵が外相であった時期（八月一七日〜九月一七日）の廉三の動きを検討してみたい。

〔書簡7〕昭和二〇年八月一七日付

大詔御喚発にて前便申上

候通り存外早く番町の家に

ファミリールユニオン出来るかと存じ

たる処運輸省にて疎開

者の帰京せんとする者に対し

当分乗車券を発売せざる

ことを決定したる旨昨夜より

ラジオにて放送致居申候従

つて御身等の帰京も当分ハ

駄目かとも存候去りとして浦

富にての冬越しの必要はな

かるべく無論冬になる前に

帰京可能と存候二付其積

冒頭「大詔御喚発」とあるが、八月一四日の「戦争終結の詔書」の発布を指す。また、「前便」とは八月一四日付の書簡（書簡6）を指す。「書簡6」では、家族の再会が近日常中になうとの見通しであったが、本書簡では疎開者の帰京制限のため、即時帰京が難しいこと、ただし冬までには帰京が可能になるとの予測を立てている。

廉三は、同日成立した新内閣で外相となった重光葵の下で連絡係として多忙となりそうであることを伝え、岳父と同居している本郷茅町の岩崎邸から出て、外務省が同年四月から賃貸契約を交わしている帝国ホテルに転居し、重光外相の側面支援を行う予定であることを述べている。霞ヶ関にあった外務省本省や大臣官邸は五月下旬の空襲で焼失しており、この時期、外務省の首脳部は文部省と世田谷にあった第一師範学校に移転していた。²⁰

書簡末尾ではポツダム宣言に基づき進駐してくる占領軍に対し、しつかり対処すべきことや空襲の不安から解放された安堵感を伝えている。

〔書簡8〕昭和二〇年八月二〇日付

拝啓

陳者東郷君の選定し

たる大臣官舎（渋谷松涛

の回教協会会館）ハ敵産を
没収したるもの由にて敵占領
軍が来れば回収される恐れもあり
て重光君ハ唯今帝国ホテル
に滞在中にて毎日出勤前
八時より九時までの間に聯絡
に来てくれ（番町時代の様に心
得居るものの如し）との事にて
毎朝茅町より帝国ホテル
まで通ひ居申候何と言ふ地
位も官名もくれる様子も見
へざるも小生も強いて求めもせず
まあ同君の私設顧問の様
な形にて二人きりにて色々相談
致居申候
降服となりたる上ハ（幸に独
逸の様に無条件降伏には
あらざるも）対等の外交とか
交渉とか言ふものハ期待出
来ざるも然し我が方が受諾
したるポツダム宣言の義務
履行の上にも種々の交渉

（後略）

冒頭は、東郷茂徳前外相²³の推薦により外務大臣官舎の候
補であった渋谷松涛のイスラム協会会館が、占領軍の接收
対象となる可能性が高いため、帝国ホテルを外相オフィス
として利用している状況がわかる。廉三は重光のオフィス
を訪問し、情報交換を行っていた。括弧書きで番町時代
云々とあるのは、二度目の外務次官時代のことを指すと思
われる。廉三はこの度の連絡係を担当するに当たり、重光
から正規の職を与えられなかったが、不平も漏らさず、重
光の私設顧問という形で行動していた。実際は重光も廉三
の処遇を考えていたようで、後述するように九月初旬、一終
戦連絡中央事務局」長のポストが準備される。

書簡中段ではポツダム宣言受諾についての廉三の考え方
がうかがえる。ポツダム宣言の解釈をめぐっては当時から
様々な意見が見られたが、廉三は日本の降伏をドイツの無
条件降伏とは別個のものと考えていたようである。²³また、
対等の外交や交渉は望めないが、外務省の活躍する場が今
後増すことを予想し、占領軍側の政治顧問が知日派のグ
ルー元駐日アメリカ大使であれば交渉が行いやすくなると
の希望的観測も述べている。²⁴

この他、重光が通勤の利便性を考えて、番町にあった澤

案件ハあり其間におのづから
外務省活躍の分野あ
りと思ひ居る次第に候噂さるる如く
グルーか先方の政治顧問にでも
なつて出かけて来てくれれば色々二
やり易い所も生するならんと話
し居る次第に候
重光君ハ番町の君の家を
借りようかなあと力居りたるるにより
秘書官に対し先づ行つて
むし焼きになりたるカーペット、ベッド
カーテン等を何の程度に補
充修理せば住める様に
なるかを見極めて来てくれと
話し置きたる次第に候

（中略）

昨日晩、玉川まで歩いて幣
原様を訪ねたるに、此事態に
鑑み海軍が小坪の別荘
を早くあけてくれるらしきにより、そう
すれば鎌倉に引越す積りなり
と申居られ候

田廉三の私邸の借用を考えていたことがわかる。番町の廉
三邸も空襲の罹災を受けたが、比較的軽微だったこともあ
り、外務省からも利用の問い合わせがあったことは前述し
たとおりである。²⁵ただし、浦富から帰京予定の美喜たちが
住む場所の確保や重光の外相在任が比較的短期間であった
こともあり、結局これは実現しなかった。²⁶

書簡末尾では、前日の晩に幣原喜重郎（一八七二―一九
五一年）を訪ねたとある。幣原の妻は美喜の伯母にあたる
ため、廉三にとつても義理の伯父にあたる。ここでは重光
から得た情報などをもとに時局、政局に関わる話も交わさ
れたものと推測される。

〔書簡9〕昭和二〇年八月二三日付

拝啓

陳者敵の進駐ハララジオにて聞か

れたる通り先づ平塚と横須賀

を中心として行はるるものにして

三十日多分横浜港外軍艦

上にてフォーマルサレンダーの調印が

行はるる筈に候

大磯辺の我方軍隊は廿五六日

までに他に移動する予定なるを

以て大磯の家も解放さるる筈にて、而して敵の進駐も軍事占領にあらずして、我方が忠実にポツダム宣言を実行するや否やを監視する趣旨の所謂保

障占領なるを以て勝手に大磯あたりまで来て家や物資を徴用徴発することなき筈に有之候

(中略)

小生も重光君が毎日連絡に来てくれと言ふに付毎朝食事がすむとすぐ七時半には茅町を出て地下鉄か省線にて帝國ホテルまで出かけ居候も都合によりてハ又々ホテルに引越そうかとも考へ居申候出来る丈ヶ御父上の御相手をしてくれとの御身の言葉には副はざるわけなれど御父上ももう空襲がある訳ではなし壕通ひの御相手がなくともよろしと存ぜられ

な解釈をしている。前述のとおり、ポツダム宣言受諾や「降伏」をめぐることは当時から様々な解釈がなされていたが、本書簡は廉三の「進駐」に対する解釈の一端を示しており興味深い。

書簡後半は、毎朝重光外相と連絡を取り合っていることや帝國ホテルへの転居の件を繰り返し伝えていく。その一方、書簡末尾では、重光外相がどの程度自分を必要としようとするのか不透明である不安も吐露している。また、同居中の岩崎久弥が「時局、政局」を非常に知りがるので、集めた情報を提供している様子がわかる。事実、廉三は久弥に宛てて、美喜よりも詳細な情報を伝えている。三菱財閥の当主を引退してすでに久しいが、政財界に未だ隠然たる影響力を持っており、占領軍の財閥に対する動きや政財界の動静、また、敗戦後の日本社会の変化について大変気にしていたものと思われる。

〔書簡10〕昭和二〇年九月二日付

(前略)

然し之ハ海軍省

其物が本日の降伏文書を調

印した上で如何なる仕事か残

るか見当付かざる故に兎も角

唯だ時局、政局に関する情報是非常に知り度がられ小生が何か情報を持帰るのを待つて居らるる様子に付、其為には事務所なり、茅町なりに伺つて申上ぐることに致すべく候但しまだホテルに行くことなどは御父上にも御話致したる次第には無之、一に重光君がどの程度に小生を必要とするか、其仕事の性質ともはつきり決まった上にて御話しする積り、それまでは此俣茅町に御世話になる積りに有之候

(後略)

冒頭、「フォーマルサレンダーの調印」つまり降伏文書の調印が八月末に行われる予定であることを伝えているが、周知のようにこれは、九月二日に延期される。続けて占領軍の進駐について廉三の考え方が述べられている。進駐は軍事占領ではなく、ポツダム宣言履行を監視するための保障占領であり、強制的な徴発はないと楽観的

も今少し残れと言ひ居るものと思はれ候戦争がなくなつた上而して海軍其ものがやがて解消される事態に立ち至つてもも続いてシヨート、ウェーヴ、ニュースを聴取させる必要もなき次第に御座候

(中略)

小生ハ大抵毎朝八時には帝國ホテルに出かけシゲパン会議を致居候一層ホテルに引越そうと思つたら米新聞記者などが六七十人もやつて来て、重光君も引越そうと(麻布市兵衛町の原田積善舎^②か大東亜省官舎となり居る故に之に引越す由)申居候様の次第にて小生のホテル引越も一寸見合せ居候

(中略)

本日はいよいよ降伏文書調

印の日、唯今九時、重光君

か敵軍艦に乗り込みたる頃と存候

急ぎ右まで

(後略)

〔書簡10〕が記された九月二日は、降伏文書が調印された日である。敗戦により長男の信一が所属する海軍の消滅がそう遠くないことや情報収集のための短波放送受信の必要性がなくなること述べている。³⁰⁾

また、毎朝、帝国ホテルへ出かけ、重光外相と情報交換を行っていることを伝えているが、GHQが同ホテルを接収対象としたことから(接収は九月一七日)一時本格化した同ホテルへの転居は先送りとなる。この他、美喜に対しては、速やかに帰京するように促している。³¹⁾

書簡末尾では重光がこれから降伏文書の調印に赴くとしている。廉三の書簡の中で執筆時間までが記載されている例は珍しい。

一方、廉三と同居中の岩崎久弥は八月二十九日に千葉県内の末広農場にむけて出発したため、留守宅を預かる廉三は末広農場に滞在する岳父に宛ても書簡を出している。³²⁾次にそれを見てみる。

〔書簡11〕 昭和二〇年九月五日付

(前略)

側尔はもつと強き意見を主

張し居る者もある趣尔有之候

結局彼等はいまでも真珠

湾を忘れず我方言動に

常に猜疑の眼をみはり居る

ものらしく我新聞紙等か

国体護持とか日本再建

とか言ふ其裏尔は此次の戦

争を目指し居るかの如く

疑ひ居る向もあるらしく、進

駐軍を彼方此方に分散し

居るも各地各方面の動向

監視の為めと思はれ申候

然し重光君の努力により

我方の真意も除々に理解

してくれるらしく其猜疑感

を一掃したる上ならでは経済

問題等の交渉も円満なる

進捗を見ることハ不可能

なりと觀察致居り折角

重光君に骨を折りもらい居る

訳に御座候

小生ハ不相変大低毎日朝

八時に帝国ホテルに趣き重

光君と色々協したる上

彼方此方の聯絡に出かけ居

申候。貿易の方面尔て

外務省の足らざる所を補ふ

審儀会様のものを造ること

に有之。洪沢敬三君

などの若い儕を糾合した

深淵たる国体を造りくれ

と言ふのが重光君の注文に

有之。其趣旨尔てかけ廻り

説き廻里居申候幸に大分

涼しく相成候為め歩き廻

るのに仕合せ致居申候

重光君自身ハ其後毎日

マツカーサーと会谈致居候処

マツカーサー自身は頗るコレクト

尔て話せば解つてくれるらしきも

其部下に殊に米海軍側に軍政施行をも主張

し兼まじき強硬意見あり

更に英国側殊にソヴェエツト

急ぎ右御知らせまで如斯

御座候 敬具

九月五日 廉三

御父上様 台下

これ以前のどの美喜宛の書簡よりも時局、政局に関する記述は詳細である。前述のように岩崎久弥は、敗戦後の大きな変動に対しても関心を示し、東京の本郷茅町に廉三と同居していた期間、廉三が重光外相から得た情報により中央の動静をある程度把握していたものと思われる。末広農場へ短期の滞在に出発した岩崎久弥に対しても廉三は書面での報告を怠っていない。依然として毎朝帝国ホテルに重光外相を訪れ、情報交換を行っていることを述べ、洪沢敬三ら若い世代を中心に「澁刺とした国体」を作ることが重光の目的で、このために廉三が水面下で行動していることを伝えている。

その後、重光外相経由で得たGHQに関する情報を詳しく伝えている。特にマツカーサー総司令はコレクト(この場合は、日本側の進言受け入れて、修正を行うことを指す)だが、米海軍を中心に強硬意見があることをも伝えている。事実、九月二日の降伏文書の調印直後、GHQは日本に直接軍政を布き、行政各部門を統治するため軍布告を発

令した。このため、終戦連絡中央事務局長岡崎勝男が同日深夜米国マーシャル参謀次長との会談で、直接軍政施行の差し止め成功し、翌日の重光外相とマッカーサーとの会談の結果、改めて日本の間接統治で合意するという一幕もあった。廉三がマッカーサーを「コレクト」と評したのはこのような出来事を聞き知っていたからであろう。

更に廉三によれば、右のようなアメリカの行動の根底には「真珠湾攻撃」や日本の新聞紙上に踊る「国体護持」、「日本再建」という言葉から日本が次の戦争を目指しているのではないかと深い猜疑心があるとす。また、このような猜疑心から進駐軍が監視のために日本各地に展開しているのだとも伝える。

一方で、アメリカ側の猜疑心は少しずつ改善の様子を見せていると重光の活躍を評価しつつも、アメリカ側の猜疑心を解かなければ、経済問題の交渉も円滑には進まないだろうと述べている。三菱財閥としても「経済問題」の改善は死活問題に関わるだけに廉三としても岳父にこのような情報を伝えたものと思われる。

[書簡12] 昭和二〇年九月八日付

(前略)

小生も重光君との毎日の会見もあり

あるべきも)要するにデマが多く、米

軍も、我方民衆も慣れるに従

って平静に帰しつつある様思

はれ候鳥取県にソヴィエト軍が

来るなどは以ての外にデマに御申候

(後略)

帝国ホテルへの転居は困難が予想されること、いずれにしても重光外相との連絡の利便性を考慮して茅町の岩崎邸からは離れる考えであることを伝えている。また、重光外相も帝国ホテルから原田積善舎への移転を考えていることを伝えている。この書簡でも美喜に大磯までも帰るようには解放されたものの、新たに占領軍による接收の危険が生じたからである。占領軍が本格的な上陸・展開を始めて一週間ほど経過しているが、各地で略奪・暴行の情報が出回っていることや鳥取県へのソビエト軍の進駐の噂など当時の状況を伝えて興味深い。ところで廉三は同日、末広農場の岳父にも書簡を送っている。

[書簡13] 昭和二〇年九月八日付

拝啓

帝国ホテルに引越そうと思ひたれどホテルも米人の根拠となる様子にて重光君も其内原田積善舎に移る様申居り小生も御父上御帰京を俟ちて事情を御諒解頂きたる上日本宿屋にでも移らふかとも考へ居候も之もなかなか適当にして便利のいい所とてハ無之様子に御座候

(中略)

付てハなるべく速に先づ大磯までも帰らる様致度候大磯も平塚進駐の米軍の将校連の宿舎(水洗便所かありとの理由にて)に借せとて警察側より申来りし由なるも、前外務次官の家族か唯々疎開中なるも其内復帰する故、貸与は同意出来ずと断れと神田に伝達致しやりし次第に御座候
米軍進駐に付てハ掠奪、暴行等報せらるるとも(多少の事実ハ

陳者進駐米国軍側

との折衝聯絡の為め先

般外務省に終戦事

務局なるもの設置せられ

長官として岡崎勝男

なる者任命せられたる処

岡崎君尔てハマツカーサーに

対してハ勿論、国内各省

との折衝の上にも物足らず

とて各方面より批難の声

高まり依って本日重光君

より小生に出馬方勸説有之

申候今後米国側の

要求と日本側の之に

ずる能力との間に大なる

径底あり為に聯絡局

長官は板挟みとなりて苦

労もあり攻撃さるる事も

あるべしと予想せられ候へ共

重光君をヘルプする趣旨

尔て親任侍衛の長官

たることを受諾致し来週

中頃ルテ発令のことと相成
申候右不取敢御報
申上度如斯御座候

敬具

九月八日夜 廉三
御父上様 台下

冒頭、九月八日に重光外相から「終戦事務局」長官のポストが用意されたことを伝えているが、同日付の美喜宛の書簡（書簡12）では、このことは触れられていない。「終戦事務局」とは正式には「終戦聯絡中央事務局」（終連）を指す。連合国軍最高司令官より示されたGHQと日本政府との中央連絡機関設置要求に応じて、八月二六日外務省の外局として設置され、初代局長には外務省調査局長であった岡崎勝男が就任している。岡崎は、前述のように降伏文書の調印の際、重光外相に随行した他、直後に起こった直接軍政施行問題についても米軍側とねばり強く交渉し、これを撤回させるなど敗戦直後の米軍との折衝に重要な役割を果たしている。ただ、廉三より十歳ほど若い岡崎とは直接的な接点がなかったためか、廉三による岡崎評は「岡崎君ルテハマツカーサーに対してハ勿論、国内各省との折衝の上にも物足らずとて各方面より批難の声高まり」と手厳

勝男君を次長とし、太田三郎君を

官房長（秘書官長）とし外に

成田第一部長武内（竜二）第二部

長、倭嶋第三部長等あり。第四

部は経済問題故大蔵省あたりより

取る筈

来週中頃、（十二、十三日頃）発会の筈

にて毎日外務省（間もなく放送

協会の隣の日産館に移る筈）

に通勤することとなる訳なるが茅

町に電話なき為め一時帝国ホテル

に移るやも知れず、ホテルが米軍に

取られれば何所か日本旅館にでも

移るかも知れず候

（後略）

廉三から美喜に宛てて、同日に複数または、連日書簡が送られることは珍しい。美喜には本書簡で初めて「終連」局長就任の話を打ち明けている。或いは、「終連」局長就任の話は八日に美喜宛の書簡（書簡12）を出した後、岩崎久弥宛の書簡（書簡13）を書くまでの間に連絡がはいったのだろうか。

しい。廉三は、終連の局長となれば、米軍側と日本政府との板挟みで相当の困難が予想されるとしながらも受諾の上、重光外相を側面支援する旨を伝えている。

敗戦以前から重光外相の情報屋として活躍してきた廉三であったが、これまで、「何と言ふ地位も官名もくれる様子も見へざる（書簡8）」状態の「私設秘書」であった。ここに来て重光外相も廉三のこれまでの活躍に酬いるため、「終連」局長のポストを準備したのである。翌週には就任となる予定であった。

岩崎久弥宛である本書簡は、（書簡11）同様、かなり詳細に時局、政局に関する情報を伝えている。これは、岩崎久弥が「時局、政局に関する情報は非常に知り度がられ小生が何か情報を持帰るのを待つて居らるる様子」（書簡9）に対して廉三が忠実に情報を提供していることを裏付けていよう。この様に見てくると廉三の岳父と妻に対する情報伝達の軽重の差が見て取れる。

〔書簡14〕昭和二〇年九月九日付

拝啓

昨日重光君の懇望にて終戦事

務局長を引受申候マツカーサー

との交渉を担当する次第にて岡崎

冒頭、終連局長に就任すればマツカーサーとの直接交渉が重要な任務となるため、本人の意気込みが伝わってくる。この他、予想される「終連」の人事構成について伝えられている。前述のように、「終連」は外務省の外局として設置されたので、岡崎以下の人物はいずれも外交官であるが、太田以下の四名はいずれも昭和初期に外務省に入省した人物で、廉三より一回り若い世代である。敗戦後の日本外交の主流も世代交代の時代に入っていた。

岳父に伝えたように（書簡13）、翌週中頃には終連局長の発令予定であること、外務省の庁舎が日産館となりそうであること、業務の都合上帝国ホテルに転居したいが、米軍による接収の可能性があることを伝えている。

〔書簡15〕昭和二〇年九月十一日付

急啓

小生の終戦聯絡事務局

長官就任の件本十一日の

閣議を経て明日発会となる

手筈なりし処内閣側より

突如之を外務省より取上げて

総理の宮殿下を総裁とする

大きな機構とする案を提出し

来り申候宮様が直接マッカーサーと御交渉相成る様な事としてハ頓て皇室に累の及ぶ様な事態發生の懸念も有之
良案とは思へず候へ共兎角降伏文書調印以來（之も何も重光君が好きで調印に当りしにあらず、みんな降伏の責任を負ふまいとして引受手がなきにより重光君が当ることとなりしものなり）外務省のみがいい仕事を取る様に嫉視する連中も有之依てこそ突如右の内閣案をでっち上げ来りしものに御座候いづれ本日閣議にて外務省案と内閣案をめぐり一波瀾あるものと予想せられ申候其結果如何によりてハ小生の任命案も立消えとなるやも知れず候政治の動きと言ふものは面白きものに御座候静かに視望の積りに有之候

は面白きものに御座候。静かに視望の積りに有之候」としつつも困惑している様子が見える。

〔書簡16〕昭和二〇年九月一五日付

四日付の御手紙拝承

一、米軍に上陸されたらひどい目に遇ふから其積りで皆国義勇兵で戦へとは所謂本土決戦時代の戦意を昂揚させる為めの軍側のスローガンであつた。其れが休戦後になつて地方に伝はつたものだから、占領軍が来れば婦女子ハ連れて行かれるなどと言はれ出したのだ。

（中略）

それは皆デマか産んだ恐怖であつた。フランスあたりで独乙軍の入城前にはそんな不安か漲つたものであつた。素より多数の米兵の中にはビヘーヴしないものもある。其為めの事故は今日發生しとるらしい。然し米軍としてハそんなのには厳罰を以て取締つて居るらしく、行儀の悪いのが原則ではない。現に省線電車や地下鉄や三越（主として衣料部）でも行儀よく乗つたり、買物をしたりして居る米兵を多数に

小生の長官就任の件ハ本家へも既に昨日の書面にて御知らせ申上置きたるにより、本書面此仮本家へ御届けして御一読をこひ下され度候

九月十一日

廉三

美喜子殿

順調に進んでいた「終連」局長就任の話は、閣議当日に突如、内閣側からの反対を受け、難航している様子を伝えられている。廉三は内閣が「終連」の権限を持ち、東久邇宮首相が総裁に就任、マッカーサーと直接交渉すれば、いずれ皇室に災いが及ぶことを懸念している。また、降伏文書調印以降、外務省の活躍に対する嫉妬があることも伝えていゐる。今回「終連」局長のポストを準備してくれた重光外相については、降伏文書の調印に至る経緯を同情的に記している。

いずれにしても局長に収まる予定でいたつもりであつた廉三であつたが、「終連」の管轄をめぐつて外務省と内閣との間で突如始まつた綱引きを前に「政治の動きと言ふもの

見かける。其内銀座あたりに米兵相手のバーやピヤホールも出来る由、米軍故に田舎にでも行く必要、心配はない。

（中略）

なる程考へて

見れば一年の間に二度も三度も家財道具をまとめて大引越をしたり混雑の汽車の中を浦富まで何度も往復したり、気の毒でもあり、相済まぬ事であつたと思つて居る矢先御身の今回の手紙で時々人臆をのんで居ると聞き其れ程体にこたへて居るのかと思ひ居る次第なり

（中略）

それから重光君との関係だが、之は古い因縁で吾々の結婚当時大磯から通勤した時、汽車の關係で朝役所に着くのが十時半、十一時にもなる。他の課員の手前もあるのに、其れを寛大に見てくれた課長ハ重光であつた。それからアルゼンチンに転出させると聞いて、「澤田は欧羅巴が長かつたのだから今度は現在の自分の支那課で働かせそれから支那に転出

せしめる」と言つて時の次官埴原氏と長い間交渉してくれた。吾々の出発か十二月になつたのも其為であつた。更に古い因縁を云へば其以前巴里講話時代、谷

栗山、加藤と小生と四人の官補の中で重光ハいつも小生を重用してくれた。最後に堀内が松平さんの入智慧で小生を本省に置くまいとした時、重光ハ滿支旅行に小生を引張り、新京行をすすめたなるべく本省近くに居る様に計らつてくれた事もある。之に酬いる意味に於て丈けでも小生は何所までも重光を補佐して義理ハ尽してやり度いと思つて居る。

小使走りをするなどとは二人の間を嫉視する奴の悪口に過ぎぬ。重光ハ反対に、小生を利用して三菱より金の融通を付けてもらい之を以て国粹同盟の笹川良一派を養つて居ると言われて居る。即ち言ふ奴は両方の悪口を言つて居るのである

(中略)

本年正月革新派連中が小磯総理に陳情書を出した時、松本次官なら

た。本書簡では、もはや「終連」についての記載は一切見られない。

冒頭、恐らく四日付の美喜の書簡の中に記載があるのだろう、占領軍による暴行事件などの噂が地方に伝播している話を受けて、日本軍が流したデマがもとになつていると、一部の米兵に問題を起こす者があるが、周りで見かける米兵にはそのような例はないことを述べる。

敗戦後、廉三は美喜に度々上京を促してきたが、本書簡では、交通事情が悪い中、複数回に及ぶ長距離移動は大きな負担となることから、当分の間の浦富滞在を認めている。

さて、本書簡の大半は重光外相と廉三との関係についての記述が続く。繰り返して述べているように、廉三の回想録や従来の研究からは、廉三が外務省のどのような人脈の中に位置していたのか、どのような対外政策を考え、共鳴していたのかほとんど掴めなかった。既に紹介した書簡からもこの時期の廉三が重光と密接な関係にあったことがわかるが、公務や他の外交官に対する言及は決して多くなかった。そのような意味からも本書簡は、重光外相との付き合いや他の外交官についての記述があること等きわめて重要である。この他、廉三は、重光外相を全力で支える決意を述べる一方で、廉三と重光双方の思惑についてささやかれていた陰口についても記しており興味深い。

すぐ処分するが澤田には出来ない、したら其痛い所をすぐ曝露してやると触れ廻つて居たが、二人を首切り、爾余十数名を戒飭処分にしたが、何事もなかった

(中略)

どうせ小生がすっかり隠退するまでは、而して時々公職に出て行く間は、而かも其出方がビルマ初代大使とか、親任官の次官とか派手な出方をする間は、先輩からも後輩からも嫉妬され、一所になつて何んとかとか噂やらデマやらをでっち上げて放送しよるよ。之を一々気にして居つた日には何も出来やせん。

然し重光の前に卑屈にならん様には此上とも気を付けよう。其意味に於て御

前の注意は感謝する。

急ぎ返事まで。 早々

九月十五日

廉三

美喜子殿 坐下

「終連」局長就任の話が最終的にいつ決着をみたのかは不明だが、結局、廉三は「終連」局長に就任することはなかつ

また、二度目の外務次官任期中、外務省内の「革新派」職員を処分したことに触れている。ここでいう「革新派」とは、大正年間に廉三もその創設にかかわつた「革新同志会」のことではなく、革新同志会が推進した外務省改革の行き詰まりに対する不満分子や満州事変後急速に台頭したドイツ・イタリアとの同盟強化や外交介入を続ける陸軍との連携を指向した白鳥敏夫らに代表される集団を指す。ところで、廉三が昭和一三年秋、有田八郎外相の元で次官となつたのは革新派への「理解者」であつたからであるとの指摘もある。ただし、本書簡を見る限りでは、廉三が革新派に対して一定の理解を示していたという証拠は見出せない。仮に廉三が革新派に対する理解者であつたのであれば、最初の次官就任から二度目の次官就任後までの間、廉三の中でそれまで革新派へ示してきた理解を変更改せるような出来事が何かあつたのだろうか、また昭和二〇年初頭に行われたという廉三の革新派職員に対する処分などについてまだまだ不明な点が多く、これらの問題については別稿で詳しく検討したい。

廉三の水面下での交渉に対する風当たりもさまざまなのがあり、苦勞している様子を吐露している。書簡末尾では、重光外相に対して卑屈にならないように気をつけるとある。美喜からの書簡には廉三の重光に対する崇拜に近い

親近感に対する警告が記されていたものと思われる。

四 重光の外相辞任からインド行まで

敗戦から約一月後、連合軍による占領が全国に展開していく一方、新生日本の舵取りをめぐる状況は依然混沌としていた。このような状況の中、「終連」の内閣移管問題などから九月十七日、重光外相はその職を辞し、後任は吉田茂が引き継ぐこととなった。

重光は外相を辞職すると再び日光に蟄居したため、廉三は中央での活躍の場を失った。廉三にとっても重光の外相辞任は大きな影響を与えたのである。

本章では重光の外相辞任後の動向を書簡から見ていく。

〔書簡17〕昭和二〇年九月二〇日付

(前略)

重光は前便にも一寸書いた通り内閣との間に意見が合はない所が出来遂に業を煮やして辞めて日光に帰ってしまった。次はドンキホーテ式の吉田君のやり方では小生が手助けするチャンスは少ないと思つて居る。

能性が十分に考えられる。⁵⁶

この九月二四日付の書簡には、時局や政局についての記述は見られないが、追伸の形で義理の伯父・幣原喜重郎が一〇月に逗子・小坪にある別荘に転居する予定であること⁵⁶を記している。美喜宛の書簡の空白を埋めるものとして重光から廉三に宛てた書簡が残る。次にそれを見てみる。

〔書簡18〕昭和二〇年一〇月九日付

拝呈

政界の御消息有難く拝見仕候⁵⁷洪沢を

「」廻り模様判断

致候世情紛々今度

尚幾曲折あるへく軍

閣に便乗せるもの

「」追隨するもの共

「」物がは無之真二

日本建設二志す同

士の結束を必要と致候

今回幣原男の出馬

「」に我意を得たる

ものに候大分勇氣を

(中略)

帝国ホテルも第一ホテルも丸ノ内ホテルも米軍又ハ外国人専用⁵⁸に指定された。

(後略)

本書簡は同月一〇日付の美喜からの書簡を受けて執筆されたものである。本書簡で重要なのは吉田新外相の下では自身の活躍の場はないことを明言している点である。書簡後半では転居を予定していた帝国ホテルなど都内の有名ホテルが相次いで接収されている様子を伝えている。また、番町の自宅は修復のめどがたたないため、美喜たちの帰京も大磯までであることを合わせて伝えている。

この他、九月二四日付の書簡は、同月一五日付の美喜からの書簡を受けて書かれたものであるが、東京への帰京を断念し、大磯へ一旦落ち着くことで合意した内容となっている。近いうちに帰京の方法などを相談するため、美喜が上京を考えていることがわかるが、実際に実行されたか否かは不明である。ただし、五月に美喜たちが浦富に疎開して以来、十日と空けず書かれてきた書簡がここで途絶え、次に書簡が交わされるのが一〇月二〇日と約一月も間が開くことを考えると(表―1参照)、一旦、美喜が上京した可

要せられしたるは想像二難

からず如何にして議

「」を誘致するかの

〔橋〕渡しの役目ハ実二

重大と被存候但シ周

囲の人々に野心を起さ

せぬ様にするが肝要と

「」故内閣一存では見

苦しく候今抑その節

もあらず呉れぐれよろしく

御鳳声願上候小生

「」君帰京談に

よれば今月中ニは鎌倉

ニ引移り得んかと存候

鎌倉ならば近く便利

〔「」候「」今後の方針等

篤と御相談申上度存

居候 尚竹光君

に託し食料品多量

〔御〕〔恵〕投被下時節柄

何よりの品厚く御礼

申上候

以上右取敢乱

筆御許し被下度候

忽々 不一

十月九日 葵

澤田仁兄

追而新内閣の顔振

非常によろしく芦田

氏の入閣ハ真二喜び

にて不堪今氏多年

〔苦〕節の結実は愉

快ニ候尚檣橋君も

大に期待せられ候御席

の節ハ宜しく御伝言

被下度候以上

一〇月九日の幣原内閣（昭和二〇年一〇月九日〜昭和二一年五月二二日）成立当日、重光葵から廉三に宛てたのが本書簡である。虫害がひどく、判読不能な部分については〔一〕で示した。廉三は、重光の日光塾居後も、新内閣成立等、政局についての情報を伝えていたことがわかる。ただし、重光にもたらした情報はかつてのように重光の依頼の

もと活発に情報収集を行った結果であろうか。廉三にとつて義理の伯父にあたる幣原喜重郎が首相に選出されたという偶然も幸いしたのではないだろうか。いずれにしても本書簡からは重光が幣原内閣の登場と閣僚の顔ぶれに満足していた様子が伺われる。〔書簡11〕にもあるように、重光の考えは、若い世代を中心とした新しい国作りにあつたため、幣原内閣の組閣内容におおむね満足であつたものと思われる。⁶⁴

幣原と廉三はともに岩崎家出身の妻を持つ姻戚関係にあつたが、廉三が新内閣のもとで政治的活躍の場を与えられることはなかつた。

一月には美喜たちの大磯までの引き上げがほぼ確定する中、一〇月下旬になって事態が動き出す。

〔書簡19〕 昭和二〇年一〇月二〇日付

（前略）

昨十九日外務省の依頼にて
小生と松本君と二人にて又ハ
小生一人にて（重光君か旅行困難なる為め次官たりし小生等にお鉢か廻り来りしものなり）印度ニューデリー

まで旅行することとなり飛行機の都合次第（アメリカ飛行機）にて明日にも出発するやも知れず候用務内容は明確ならざるも日本政府と印度軍との関係説明と言ふことらしく大体往復十日か二週間にて事足ることと存居候白服は父上の麻のを拝借することと致候

（後略）

一〇月一九日、突如、外務省の依頼により、廉三にインド行の話が持ち上がる。明日にでも出発するかもしれないしながら、派遣人員が自分一人なのか松本俊一元次官と一緒になのかも不明と伝えている。また、要件については戦時中、日本が支援したチャンドラ・ボース⁶⁵率いる自由インド仮政府に関する説明だろうと用務内容も漠然としたものとなっており、廉三の困惑した様子がうかがわれる。

戦時中に大東亜相を兼務した重光外相は、日本を盟主としたアジア諸国の独立をかねてから積極的に推進しており、自由インド仮政府の成立や支援も強力に行っていた。

このため、本来であれば、証人喚問の対象としては重光が最適であつたはずだが、雙脚でありインド行は困難とされたため、重光外相下で初代ビルマ大使や次官を務めた廉三と松本俊一の両氏に白羽の矢が立った。⁶⁶

本史料では、明日にでも出発とあつたものの、結局、早期のインド行は回避され、「印度行のことは其後何とも申し来らず候」（一〇月二四日付書簡）という状況となつていく。

一方、いわば自身の身代わりとしてインドに派遣される廉三に重光から書簡が届いている。

〔書簡20〕 昭和二〇年一〇月二五日付

其の後御変りなきや

過日北沢君大臣の

使者として来訪マ

司令部の要望として

印度独立運動に

関する証人として小生若ハ

外務省ノ先任省員の

来印希望マントバツテン⁶⁷

よりありたりとて申越あり

云々として協議し来り候

東亜民族の独立解放

ハ素より新政策の根本

にて且つ吾人の精神を

打ち込みたる所なれば堂々

と云ふへきは云ひ得るも小生

が行かずして済めばそれ

に越したるなき旨回答

致置候

政界方面の事ハ不鮮

明なるも政治家ハ大体大同

団結出来たるが如く結構

に候も将来ハ如何になるや

見当付かず候

近衛公の態度及新聞公

表等ハ醜態に非すや結

局累を皇室及国家

ニ及すことなきや更ニ

又我國上下の媚態ハ

マツクをして益々乗せしむ

るの虞もあり特に背後ニ

蘇聯あるに於て益々

用心の必要あるやに被存候

以上不取敢

十月廿五日

葵

澤田廉兄

追而秋冷然ハ御自愛

被遊度委細竹光よ

り御聴取被下度候

この重光からの書簡により、今回のインドでの証人喚問の人選がどのような過程で決定したのかがわかる。その一方でインド行の人員が、誰に決まったのか記載されていない。一〇月二〇日付の書簡で廉三は美喜に自身が派遣人員の候補であると伝えていたが（書簡19）、それから五日経った時点では、このことを重光には知らせていなかったようである。「東亜民族の独立解放ハ……」の箇所は、前述のように、戦時中、重光が外相、大東亜相時代に推進した南方諸国の独立や支援を指すが、その事についての自説を枉げることなく表明している。一方、多大なる好意と期待を表明していた（書簡18）幣原内閣に対しては、本書簡では、「将来ハ如何になるや見当付かず候」とややトーンダウンが見られる。

また、近衛文麿元首相の動靜についての重光の批判も見られる。一〇月四日、近衛はマッカーサーと会談し、天皇

や財閥は日米開戦の際のブレーキ役であったので、これらを除くことは日本の共産化を促進すると説いた。GHQは一旦、近衛に憲法改正を託すが、国内外の新聞は戦時体制

を敷いた近衛に対する批判を強め、一月になるとGHQも近衛を憲法改正から外した。本書簡中「近衛公の態度及新聞公表等ハ」云々とあるのは、これら一連の近衛の動きを指すと思われる。

書簡末尾では日本社会全体が占領軍に対してこび入り、このことがマッカーサーを勢いづかせる結果となることや日本を取り巻く現状の背後にソ連の脅威があることについても述べている。

その後もインド行の話は大きな進展が見られなかったようで、一月三日付の美喜宛の書簡にはこのことについての記述はなく、一月二三日頃に美喜たちが大磯まで帰ってくるのと記述が見えるだけである。更に、「小生の出發は昨十二日の筈なりしに本日もまだ何も申し来らず毎日待機の姿勢にて甚だ困ったものに御座候」とあるなど（一月一二日付書簡）、インド行が当初の予定から大幅に遅れていることを伝えている。この一月一二日付書簡の追伸部には、番町にあった廉三宅が占領軍の徴発にあったこと、戦前から交流のあったポール・ラッシュユの協力により家賃は支払ってもらえそうだと伝えている。

〔書簡21〕昭和二〇年一月九日付

新聞報道（タイムス）

によれば貴兄と松本君

とは急に印度御出張

の事となりたりとの事

御苦労千万ニ存候且つ

小生の身代りの意もある

べく誠ニ御氣の毒にて御

心労厚く御礼申上候

印度独立ハ民主々義

の点より云ふも当然の事

にてボーズ氏の功を口にす

る独立の獲得ハ男

らしき遣り方と云ふの外

無之候 先方が如何な

る事を要求するや不明

なるも事理ハ極めて明

瞭と存候但しマニラニ

於ける山下裁判に於ける

が如く（比島民ノ若ニは

本人の野獸性を晒す

宣伝材料とする) 宣伝

二使ふこともあるべく此点

我方新二用意の要

あるは勿論二候小生ハ

月半には鎌倉に参る

べく若し間に合へば途

上東京にて御目ニかかり度

以上

十一月九日 葵

澤田 賢兄

足下

重光から廉三宛ての書簡で、昭和二〇年内最下限の書簡でもある。本書簡によれば、重光はインド行の人選について新聞で初めて知ったようである。(書簡20)同様、自らが強力に推進したインド独立支援については、微塵も迷いが無い。ただし、証人喚問が宣伝に利用される危険性についても指摘しており、一〇月八日に開廷しているマニラ大虐殺を問う山下(奉文)大将の責任をめぐる軍事裁判を踏まえている。

書簡末尾で鎌倉への転居の途上、機会があれば東京で会う約束をしているが、重光が日光を離れたのは一月末で

あり、廉三もインドへ向けて同月一九日に離日しているため、二人が直接会う機会は結局なかった。
一方、美喜たちが浦富を離れた日付は不明だが、一月三日付の書簡の通り、美喜達が一月二三日前後に大磯に帰ったのであれば、結局、廉三と美喜との再会は、廉三がインドから帰国した翌年一月であったはずである。

おわりに

以上、昭和二〇年五月から一月までの間、浦富に疎開中の妻美喜に宛てた書簡の分析を中心にこの時期の廉三の活動について検討してきた。

本稿で取り上げた書簡の持つ意味は幾つかあげられるが、まず、敗戦という日本にとって大きな転換点であったこの時期の廉三の活動が非常に詳細に追跡できるといふこと、二つめに本県滞在中の妻に宛てた書簡であり、わずかではあるが、当時の鳥取県の様子を知ることができるということ、そして三つめに重光葵との密接な関係が明らかとなったことである。

その一方で課題も残る。例えば、もう一方の当事者である重光の諸資料からは廉三との密接な関係を窺わせるような記述は確認できない。重光自身が廉三をどのように感じ

ていたのかは、刊行された重光の諸資料などからはよくわからない。具体的な内容は不明だが、妻の美喜が心配したように(書簡16)、廉三が書簡に記した重光への崇拜に近い親近感、或いは廉三の一方的な重光への思い入れにすぎなかったであろうか。重光の未刊行資料などの精査に加え、重光を取り巻く他の人物たちとの関係も含めてより深く検証していく必要がある。

最後に、本稿の執筆にあたり、社会福祉法人エリザベスサンダースホーム及び澤田廉三・美喜夫妻の長男である澤田信一氏には資料の提供など多くのご協力を賜った。記して厚くお礼申しあげます。

【註】

- (1) 鳥取敬愛高等学校社会部の調査、研究は、平成一七年度第四回全国学芸科学コンクール（旺文社主催、内閣府、文部科学省後援）で、『澤田美喜』とその子どもたちの記録」と題して発表され、金賞を受賞している。
- (2) 現在刊行されている各種資料や他の外交官の回想録などを見ても二度目の外務次官辞任後の廉三の動きはよくわからない。管見の限りでは、当時内大臣であった木戸幸一の日記に「昭和二〇年五月二十一日（月）晴…（午後）二時半、澤田廉三氏来室、面談。…」とあるが（木戸日記研究会『木戸幸一日記』下（東京大学出版会、一九六六年）一二〇二頁）、詳しい会話の内容は不明である。
- (3) 小坂井澄『これはあなたの母』（集英社、一九八二年）によれば、当初、美喜たちは岩崎家の別荘があった神奈川県大磯へ疎開したが、ここが軍に接収されたため、昭和二〇年五月に廉三の郷里である浦富へ疎開したとする。
- (4) 同年五月二十五日から翌日にかけての東京の空襲に際し、廉三たちが住んでいた麴町区一番町（書簡には「一番町」と出てくる。以下、本稿では番町と表記する）の家は罹災したものの焼失は逃れた。このため、外務省から外務大臣官邸として利用したいとの相談があったが、すでに他に貸出しを行っていたため、この問題を解決するため、廉三は再三、上京を促す電報を送っている（六月二十五日付書簡）。その後、「七月四日 御身出発の日近頃珍しく空襲なき一晩を送りよく眠りたり」とあり（七月五日付書簡）、六月末には美喜が上京し、七月四日に浦富に向かったと推察される。
- (5) 廉三は昭和一九年一〇月二〇日から二度目の外務次官に任じられており、翌二〇年五月一三日までその任にあった（廉三の俳句集『吟草』（三））。
- (6) 一方、美喜宛の書簡の多くは「鳥取県浦富町小磯鷗鳴荘」と宛名をしているが、浦富には「小磯」という地名は実在しない。廉三の長男澤田信一氏の御教示によれば、岩崎家の別荘があり、廉三一家もよく利用した神奈川県の大磯（戦後、エリザベスサングラスホームが設立される）の対称として浦富の牧谷熊井浜にあった別荘地を「小磯」と名付け、これで十分に郵便が配達されたとのことである。澤田信一氏が当館の特別展開催中に寄稿した原稿にも「小磯」に関わる記述がある（澤田廉三と美喜の時代）6（『日本海新聞』平成二〇年一月二二日付）。
- (7) 『吟草』（二六）によると一月一九日出版、翌年一月一四日デリー発、一六日帰京とある。
- (8) 小林躋造（一八七七～一九六二年）は、海軍出身で連合艦隊司令長官を務めた他、台湾総督（在任：昭和一一～一五年）、小磯内閣（昭和一九年七月二日～昭和二〇年四月七日）の國務大臣（昭和一九年一月～昭和二〇年三月）を務めた。廉三は、昭和一四年一月、フランス大使就任途上、台湾に立ち寄り、当時台湾総督であった小林とも会見している。また『吟草』（一一）の昭和二二年一月二四日の項に「世田谷に小林大将を訪問」とあり、戦後も往来があったことがわかる。
- (9) 「外務省革新同志会」の創設に関しては、外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年』上（原書房、昭和四四年）第三編、第二章「バリ平和会議前後」、二「外務省革新運動」、2「革新同志会」の結成に、「講和会議は種々の分野で日本に影響を与えたのは周知のとおりであるが、外務省内部でも講和会議における経験を契機として、一つの革新運動が進展していく…。この際革新運動の口火を切ったのが誰かということよりも、それが連鎖反応的に周囲に及んでいったことの方が重要であり、それほど関係者の誰もが痛感していたことであった…澤田（節蔵）電信課長、川島（信太郎）条約一課長、杉村（陽太郎）同二課長らをはじめ、相当多数の省員の賛同を得て、九月二十日（土）「外務省革新同志会」を結成した」とある。
- (10) 今回当館が整理した資料の中にはいずれも昭和二〇年内に重光から廉三へ宛てた書簡が四点確認できる（七月一日、一〇月九日、同二五日、十一月九日付）。
- (11) 竹光秀正（一九一三～一九八八年）。重光の秘書官。
- (12) 廉三が重光に宛てた書簡で現在確認ができるのは、昭和二五年一月九日、同二一日、昭和二七年五月一日、同年六月五日付といずれも戦後のものばかり四点である（『重光葵関係文書目録』（憲政記念館、昭和六二年））。
- (13) 安岡正篤（一八九八～一九八三年）。東洋思想、古典研究などで戦前、軍部、官僚などに大きな影響を与えた。戦時中は大東亜省顧問として外交政策などに関わった。
- (14) 松平康昌（一八九三～一九五七年）。福井藩最後の藩主茂昭の孫。貴族院議員。戦時中は内大臣秘書官長を務め、昭和天皇の側近集団の中心的人物として活躍した。戦後、天皇の東京裁判対策にあたった他、『昭和天皇独白録』の作成にも関わった。
- (15) 広瀬久忠（一八八九～一九七四年）。戦前、貴族院議員を務め、米内内閣（昭和十五年一月一六日～七月二二日）では法制局長
- を担当。戦後は代議士となる。重光の手記には「広瀬厚相（後の書記幹長）や大達内相は何れも内務系の出色である。…広瀬氏は甲府流の一徹な所もあるが、正義の士で、明敏なる頭脳を有つて居る。…広瀬、大達等の新人の時代が来た様で、之等の人々の前途は多忙（望）と思はれる。…」とあり（重光葵「小磯内閣」（伊藤隆・渡邊行男編『重光葵手記』（中央公論社、昭和六一年）所収）中の「不幸なる小磯内閣」、重光はこの時期、広瀬を高く評価していたようである）。
- (16) 八月一四日付書簡によれば、岩崎久弥は同月一〇日に末広農場から帰京している。千葉の空襲とは、七月六日のものを指すと思われる。
- (17) 廉三より一四歳ほど年上になる従兄虎蔵は、廉三兄弟にとつて親代わりとして、また、郷里との精神的紐帯として大きな存在であった。廉三とは多くの書簡を交換しており、廉三の回想録『凱旋門広場』によれば「二人の間に交換された書簡は、往復各々二百数十通に達している」とある（まへがき）。当館調査により、虎蔵から廉三宛の書簡が多数残されていることが確認できたが、虫害がひどく、大半の内容は確認できない。
- (18) 註（6）参照。
- (19) 美喜宛の書簡には、三男晃の安否を気遣う記述が幾つも見られる。例えば、他家の例を引きながら、五月の時点で戦死公報が届いていない状況から晃の生存を信じたいという強い気持ちをは伝えている（五月二四日付書簡）。
- (20) 重光前掲手記「戦争を後にして（果嶋日記）」中の「鐘漏閣記」。
- (21) 『外務省の百年』下、第六編、第二章「外務省庁舎及び外務大臣官邸の変遷」。

(22) 東郷茂徳(一八八二―一九五〇年)。外務省欧亜局長や駐ドイツ大使、駐ソ連大使などを歴任。東条英機内閣(昭和一六年一月一八日)同一年七月二二日)で外務大臣(昭和一六年一月一八日)同一年八月三二日)となり日米交渉を行うが、開戦を回避できなかった。鈴木貞太郎内閣(昭和二〇年四月七日)八月一七日)で再び外務大臣(昭和二〇年四月九日)八月一六日)として終戦工作に尽力したが、開戦時の外務大臣であったため、A級戦犯に認定、服役中に病没。

(23) 昭和二〇年九月二日の降伏文書調印の際、重光外相に随行した加瀬俊一(一九〇三―二〇〇四年)は、「…ポツダム宣言は、日本軍の無条件降伏のみを要求していましたが、国家としては、名誉が保たれた条件付きの降伏をしたわけです」と述べている(加瀬俊一、花井等『ミズーリ艦上の外交官―百歳翁加瀬俊一と語る』(モラロジー研究所、平成一六年)。一方、重光は「…内閣は直に其の処理に着手したが、尚此際にも従来の情性に依って日本「降伏」の意義に付ての感得に付て人々に厚薄があった。記者(重光を指す…筆者注)は此際には完全に対抗意識を捨て去り、完全に無条件に先方の指示を受け入れ、「降伏」の実を示すことが、日本の将来に向って生かす所以であると同時に、即ち敗戦を完全に認識することを総ての前提条件とするの方針に出づる…無論日本は降伏したのである。夫れは三千年の歴史に於て初めて行はれた極めて耻づべき不祥事が起こったのである。「降伏」文書は「降伏」文書で差支ないものである。其の徹底した認識の上に将来の日本人は生き得る。…」と述べている(重光前掲手記「戦争を後にして(巣鴨日記)」中の「帝国ホテルの暁夢」)。

社会公益事業や社会福祉事業を全国で展開した。

(30) 一般の短波放送受信は昭和一一年三月から昭和二〇年一月日まで禁じられていたが、他の書簡から浦富の別荘「鷗鳴荘」には短波放送の受信可能なラジオが備わっていたことがわかる。例えば、年代不明の八月一日付書簡によれば、「最も注意してもらはなければならん事ハラジオに候。外国のまで聞えることが評判になると、取調べに來られたりする恐れあるにより…(中略)…なる事なら外国のは絶対に聞かぬことにし、内国放送文けにて設定する様子供等にもよく言ひ聞かせざるべく候」とある。この書簡には廉三が美喜の両親(岩崎久弥・寧子)と旅行に出た記述がある。寧子は昭和一九年三月に死去している。この書簡は昭和一八年以前に書かれたものである。

(31) 廉三は同日、美喜に充ててもう一通書簡を出している(表一1)の(2)。これには重ねて帰京を促し、不可能であれば、大磯まででも帰るようにと述べている。この書簡には時局や政局に関する記載は一切見られない。

(32) 八月二十九日付書簡によれば、十日ほどの滞在予定で同日末広農場へ出発したとある。

(33) 当館の調査の結果、エリザベスサンダースホーム内には、廉三から岩崎久弥宛の書簡が合計六通(大正二二年九月一〇日、昭和一九年一月一七日、同年三月二二日、昭和二〇年九月二日、同五日、同八日付)確認できた。大正二二年のものはアルゼンチン在勤時代で、関東大震災後の家族の無事を祝うもの、昭和一九年の二通はビルマ大使時代のものである。なお、昭和二〇年九月二日付のものは、時局、政局にかかわる内容は含まれない。一方、岩崎久弥から廉三宛ての書簡は一点(昭和二〇年八

(24) ジョセフ・ゲル(一八八〇―一九六五年)。アメリカ、ボストン出身。外交官として活躍し、一九三三年から十年にわたり駐日大使を務めた。この間、日米開戦回避に尽力した。一九四四年末から終戦まで國務次官となり、ポツダム宣言起草では天皇制の存続や緩やかな対日占領政策を進言した。

(25) 註(4)参照。

(26) 番町の澤田邸に先に入っていた借り主は八月一杯で退出予定であったが、「外務省との契約ハ進み居らず、依て外務省に対して戦争終了により吾々が帰る住むこととしたる理由により貸すことを断り、」と述べているように(八月二三日付書簡)、廉三は外務省への貸し出しの考えがなかった。

(27) 例えば、「調印日取りは八月三十一日から九月二日に延期することにマツカサー司令部より通達があった。二十日も近付いて天気模様が悪く、準備が出来ぬためであるとの事であった。…」とある(重光前掲手記「戦争を後にして(巣鴨日記)」中の「帝国ホテルの暁夢」)。

(28) その後、八月二十九日付書簡でも「…重光君ハ帝国ホテルに泊まり居り、よつて小生ハ毎朝、同君の出勤前に例の通り色々打合せをするため、八時半にはホテルに参り居候。顧問とか何とか名前はもたらずに聯絡係りをつとめると言ふ事に致居候。もう爆撃の恐れもなきにより小生も帝国ホテルに移つてもいいと考て居候…」と、重光からは公的な肩書きを依然として与えられていないことや帝国ホテルへの転居を前向きに考えていることを改めて伝えている。

(29) 原田積善舎。原田積善会のこと。松阪出身の実業家原田二郎(一八四九―一九三〇年)が一九二〇年に設立した財団法人で、

月二十九日と九月七日付の二通が含まれる)が確認できるが、虫害のため判読できない。

(34) 洪沢敬三(一八九六―一九六三年)。戦時中に日銀総裁となり、戦後、幣原内閣では大蔵大臣を務めた。なお、洪沢敬三の妻登喜子の母磯路は岩崎久弥の妹であり、敬三は岩崎家とも姻戚関係にある。

(35) 岡崎、重光の直接軍政の撤回をめぐるGHQとのやりとりについては、岡崎勝男「戦後二十年の履歴―シリーズ戦後史の証言占領と講和6―」(中公文庫、一九九九年)及び重光前掲手記「戦争を後にして(巣鴨日記)」中の「帝国ホテルの暁夢」参照。

(36) 廉三のいう「経済問題」の中に「財閥解体」が含まれるのはよくわからない。GHQは、日本の財閥は軍国主義を支持していたと認識しており、早くから財閥の解体を目指していた。昭和二〇年九月二日、アメリカ政府は「降伏後における米国の初期の対日方針」を発表するが、この中の第四章「経済」B項では財閥解体が規定されている。GHQの経済科学局が担当するなど、GHQは財閥解体を「経済」の枠組みで捉らえていた。重光前掲手記「戦争を後にして(巣鴨日記)」中の「帝国ホテルの暁夢」によれば、重光は帝国ホテルを九月一五日に引き払い、

市兵衛町の新官舎(大東亜省官舎に利用されていた原田積善舎)へ移り、外務省関係者は丸の内ホテルに移動したとある。

(38) 岡崎勝男(一八九七―一九六五年)。大正一一年外務省入省。戦前は外交官として活躍するが、後に代議士となる。昭和二八年、廉三が初代国連大使として活躍していた時期の外務大臣であった。

(39) 太田三郎(一九〇三―七六年)。昭和三年外務省入省。戦後、ピ

ルマ、ポーランド、オーストラリア大使などを歴任。

- (40) 成田勝四郎(一九〇四〜八二年)。昭和三年外務省入省。戦前、イギリス、ドイツに在勤。戦後はパキスタン、オーストラリア、西ドイツ大使を歴任。

- (41) 武内龍次(一九〇三〜九九年)。昭和二年外務省入省。イギリス、中国、満州、ソ連に在勤。戦後、通産省通商局長を経て昭和二七年、アメリカ公使で国連代表部初代代表を務めた。廉三はその後任である。その後、ベルギー、西ドイツ、アメリカ大使を歴任。

- (42) 倭島英二(一九〇五〜八二年)。鳥取県出身。昭和四年外務省入省。戦前はアメリカ、中国に在勤。戦後はベルギー、アラブ連合大使などを歴任。

- (43) 戦後、日産館は米軍に接収されたため、接收解除や日産との賃貸契約が完了し、本庁舎として移転したのは同年二月になつてからであったという(『外務省の百年』下、第六編、第二章「外務省庁舎及び外務大臣官邸の変遷」)。

- (44) 「終連」の所管をめぐる外務省と内閣の間のやりとりについては、重光も記録している(重光前掲手記「戦争を後にして(菓鴨日記)」中の「帝国ホテルの眺望」)。

- (45) 埴原正直(一八七六〜一九三四年)。外交専門雑誌「外交時報」を創刊。アモイ、アメリカや本省勤務後、外務次官、駐米大使などを歴任。

- (46) 廉三のアルゼンチン赴任については、大正八年九月に結成された「革新同志会」成立にかかわる左遷として見る節もある(『外務省の百年』上、第三編、第二章「パリ平和会議前後」、二「外務省革新運動」、2「革新同志会の結成」)。例えば、廉三の兄澤

田節蔵も「革新同志会」の結成に関わったが、「外務省最高幹部は容易にこの提案を採用せず、ことに埴原外務次官(のちの駐米大使)は強硬に反対し、われわれを省内の秩序を乱す過激分子と見なしておられたようだった。…同志会に対して好意を持たぬ埴原次官は…」と回想している(澤田壽夫編「澤田節蔵回想録―外交官の生涯―」(有斐閣、昭和六〇年)。一方、廉三自身はアルゼンチン赴任を「同志会」結成に対する左遷人事であることを否定している(『凱旋門広場』中の「会議外交と日本」)。

- (47) 谷正之(一八八九〜一九六二年)は、満州国参事官などを務めた後、戦前、戦後と二度外務次官を務めた。戦後は駐米大使を務めた。栗山茂(一八八六〜一九七一年)は、スウェーデン大使やベルギー大使などを歴任、戦後は最高裁判所判事として活躍。加藤外松(一八九〇〜一九四二年)は、中国在勤を中心に活躍、フランス大使在任中に死去。三氏はいずれも大正二年一〇月に行われた第二回文官高等試験外交科に合格している(廉三は翌年の第三回文官高等試験外交科に合格)。

- (48) 堀内謙介(一八八六〜一九七九年)。中国、イギリス、アメリカなどに在勤し、外務次官や駐米大使を歴任。戦後は駐中華民國大使を務めた。

- (49) 松平恒雄(一八七七〜一九四九年)。元会津藩主松平容保の六男。伯爵。ロンドン軍縮会議主席代表を務めた他、駐英、駐米大使などを歴任。昭和一年から宮内大臣となる。

- (50) 昭和一年一〇月、廉三は在満州国参事官となるが、「新京行」とはこのことをさすものと思われる。廉三の和歌集「詠草」一には、「昭和十一年夏紐育より帰朝したる後、次の任務も定まら

ざるに当り、支那及満洲の視察旅行を命ぜられたり。時恰かも重光君駐蘇大使に任せられ赴任前の見学の為め同じ方面の旅行を企つと聞き、同行を依頼して其諾を得たり。九月下旬東京を出発し門司にて乗船、大連、天津、北京に廻りて満洲に入り、

新京を中心として琿春、東寧、綏芬河、牡丹江へと飛行機の旅を重ねたるが、…とある。(書簡16)では、満州、中国旅行を誘つたのは重光外相としているが、『詠草』の記述では廉三が重光に同行を依頼したとする。なお、『詠草』の「昭和十一年」の箇所には「同じ年(昭和十一年…筆者注)十月下旬大使館参事官として満洲国在勤を命ぜらる。十一月廿七日新京へ赴任…」とあり、重光に同行した満州、中国、朝鮮視察の帰国直後に在満州国参事官として赴任している。一方、「堀内が松平さんの入智恵で小生を本省に置くまいとした時…」とあるのは、昭和十一年、ニューヨークからの帰国後、満州、中国視察を経て満州国参事官となった一連の経過を指すものと思われる。堀内謙介は昭和十一年四月から外務次官に就任しており、松平恒雄は、同年三月から宮内相に就任していた。(書簡16から廉三の満州国赴任には重光が深く関わっていたことがうかがわれる。

- (51) 笹川良一(一八九九〜一九九五年)と重光の関係については、伊藤隆編『続・菓鴨日記―笹川良一と東京裁判―』(中央公論社、二〇〇七年)中の伊藤氏による解題に詳しい。同書所収の付録「衆議院手帖」によれば、昭和二〇年一月一八日、次官だった廉三は重光とともに笹川と会見している。

- (52) 松本俊一(一八九七〜一九八七年)は、戦時中、重光外相下で外務次官、その後仏印大使、東郷茂徳外相下でも外務次官を務め、終戦処理に当った。重光外相下で次官を務めたことから、

昭和二〇年末、廉三とともに軍事裁判の証人喚問のためインドに赴いた。

- (53) 高橋勝造「外務省革新派の思想と行動―栗原正を中心に―」(書陵部紀要「第五十五号、平成二六年)。また、革新派については、塩崎弘明「国内新体制を求めて―両大戦後にわたる革新運動・思想の軌跡―」(九州大学出版会、一九九八年)、第二章「外務省革新派の現状打破認識と政策」に詳しい。

- (54) 廉三が、先輩外交官である吉田茂をどのように見ていたのかよくわからない。外交官、政治家としての重光と吉田茂の資質の差を詳細に比較研究したものとして、武田和巳氏のすぐれた研究がある(同氏著『重光葵と戦後政治』(吉川弘文館、二〇〇二年)。

- (55) 例えば、九月二四日付書簡で、廉三は美喜に対し、上京の際、浦富に帰っていた次男久雄を同行する様指示しているが、一〇月二〇日付の書簡(書簡19)では久雄が東京の茅町で廉三と同居している様子が記されている。

- (56) 幣原喜重郎が逗子・小坪の別荘に転居する話しは、(書簡8)でも触れられている。

- (57) 渋沢敬三を指す。経歴などについては註(34)を参照のこと。

- (58) 重光篤。重光葵の次男。

- (59) 若田均(一八八七〜一九五九年)。最初は外交官として活躍するが、代議士に転身。戦後の幣原内閣では厚生大臣を務めた。後に外相、首相を歴任。

- (60) 榎橋渡(一九〇二〜七三年)。最初弁護士として活躍、戦時中、代議士に転身。戦後の幣原内閣で内閣法制局長官や国務大臣、内閣書記官長などを兼務。

(61) 重光のこの時期の幣原喜重郎及び幣原内閣に対する好意的見解は、重光前掲手記「戦争を後にして」(巢鴨日記)中の「夕陽楼之落暉」にも見える。

(62) スバス・チャンドラ・ボース(一八九七〜一九四五年)。日本の支援のもと自由インド仮政府を樹立し、国家主席の他、首相、国防相、外相を兼務し、インド国民軍の総司令官となった。インド進行のため、昭和一九年、仮政府本部はビルマ(当時の駐ビルマ大使は廉三)のラングーンに移転し、インド国民軍は昭和一九年のインパール作戦にも参加している。

(63) インドでの証人喚問の経緯については、廉三の回想録「凱旋門広場」中「デオリー異変」と「随感随筆」中「エティケット談議」中「国際法上の「慣行」に詳しい。「デオリー異変」によれば、外務省から廉三と松本俊一その他、太田三郎(経歴は註(39)を参照)、陸軍から片倉衷、藤原岩市の両氏が同行した。

(64) 北沢直吉(一九〇一〜八一年)のことと思われる。北沢は戦時中、日本が成立させたビルマ国の日本大使館の参事官(初代大使は廉三)であった。敗戦直後、ビルマのバー・モウ首相の日本亡命に深く関わった。また、吉田茂外相の秘書官となり、更に代議士となる。

(65) ルイス・マウントバッテン(一九〇〇〜七九年)。イギリスの海軍将校。東南アジア地域総司令官としてビルマで対日本軍戦を指揮。戦後、東南アジア方面の処理に奔走した後、最後のインド総督となった。

(66) 重光によれば、インドで開催された軍事裁判において、自由インド仮政府が日本の単なる傀儡ではなかったことを廉三らを通じて強く証言させたとある(重光葵「昭和の動乱」下(中央公

論社、一九五二年)。

(67) 例えば、高松宮は昭和二〇年一月二日に「近衛ガ責任ノガレノ様ナ近衛内閣当時ノ話振りガ新聞ニ出ルト、オ上ガ義憤(?)ヲ才感ジニナツテ、ホントノコトヲ云ツテシマヘト仰ルトカ」と記している(高松宮宣仁親王「高松宮日記」第八卷(中央公論社、一九九七年))。

(68) 「特に背後ニ蘇聯あるに於て益々用心の必要あるやに被存候」の箇所は文意を正確に捉えにくい。武田和己氏によれば、駐ソ大使を経験している重光は戦時中からソ連に対し根強い不信感を抱いていた。このような中、特に敗戦直後の重光にとって切迫した課題と意識されたのは、日本の民主化による「共產革命」実現の可能性であり、重光の目には敗戦直後の日本政治は「革命前夜」に映じたとする。更にこのような状況を可能とした要因として、重光が敗戦直後の国際情勢を「米ソ協調」体制であったと認識していたからだとする(武田氏前掲書第一部、第三章「動乱の結末」)。

(69) ポール・ラッシュユ(一八九七〜一九七九年)。アメリカ、インディアナ州出身。関東大震災後に来日、山梨県の八ヶ岳山麓に教育施設「清泉寮」を設立し、布教活動やスポーツ振興にも尽力した。日米開戦後、強制送還されるが、戦後、GHQ将校として再来日。エリザベスサンダースホームの支援を行うなど澤田家との交流も深い。

(70) 重光前掲手記「戦争を後にして」(巢鴨日記)中の「夕陽楼之落暉」。